

藤原宮出土の 藤原宮以前の瓦

検討の目的 都城発掘調査部飛鳥・藤原地区では、近年、藤原宮中枢部の実態解明を目的とし、藤原宮朝堂院・大極殿院およびその周辺の発掘調査を継続的に実施している。調査では多数の藤原宮式軒瓦などが出土しているが、その中に混じり、藤原宮期より古い時期とみられる瓦の出土例も増えつつある。そこで、藤原宮から出土した藤原宮以前の瓦について、その出土傾向を分析し、それらの瓦が出土する理由を検討したい。

出土傾向 外濠、外周帯を含む藤原宮内を対象に、藤原宮期以前の可能性がある瓦の出土傾向を確認する。該当するのは軒丸瓦11点、軒平瓦24点、磚仏2点のほか、鴟尾の可能性もあるもの1点の合計38点である（図46、表12）。軒丸瓦は型式にまとまりが認められず、複数出土しているのは川原寺式3点、山田寺式2点のみである。これに対し、軒平瓦は軒丸瓦の2倍以上出土しており、いずれも重弧文である。しかし、三重弧文と四重弧文が混在し、特定型式がまとまって出土している状況とはいえない。このほか、これらの瓦はいずれも小片が多く、丸・平瓦部を含めた全体の形状がうかがえるほど残存率の良い資料は認められないという特徴をもつ。

次に分布状況であるが、大極殿院、朝堂院、内裏地区東といった藤原宮中枢部と、藤原宮外縁部付近にまとまりが認められる。さらに詳細に、出土遺構および層位に着目すると、38点中29点が床土、藤原宮期の遺構面を覆う遺物包含層、平安時代以降の遺物を含む遺構や層位からの出土であり、藤原宮期ないしその前後にさかのぼるのは9点である。それらも、藤原宮期遺構の基盤層、藤原宮造営期の溝、藤原宮期の礫敷、平城遷都時の濠埋土などさまざまである。平城遷都時には藤原宮期の建物の柱抜取穴や溝・濠などに瓦が相当量廃棄されたと考えられるが、そうした状況での出土はごくわずかである。

検討 以上のような出土傾向をふまえ、藤原宮から藤原宮以前の瓦が出土する理由を検討する。

まず、これらが藤原宮の施設に使用された可能性であるが、一定の区画で特定の型式がまとまって出土する状況を呈していないこと、藤原宮期の遺構、特に平城遷都時に瓦が廃棄されたと考えられる遺構からの出土量が少

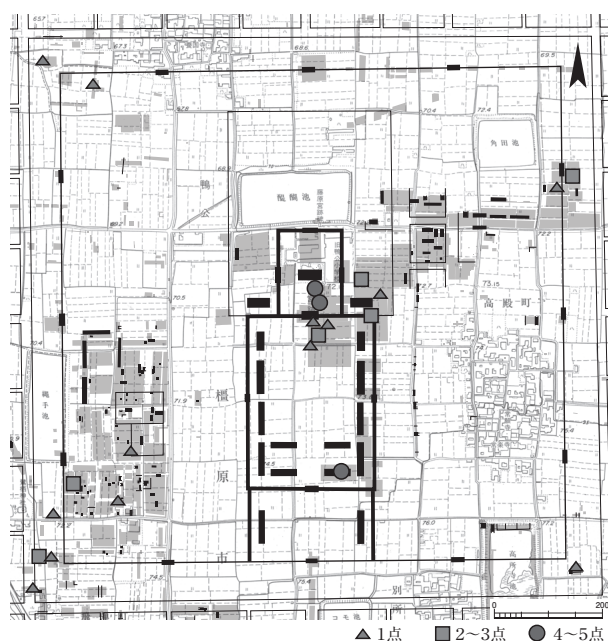


図46 藤原宮における藤原宮以前の瓦の出土状況

ないことなどからみて、かなり低いといわざるを得ない。少なくとも、古い瓦範を再使用したり、あるいは別の施設で使用されていた瓦を運び込んだりするなどして、藤原宮期以前のまとまった型式の瓦が、藤原宮式軒瓦と同様に、藤原宮内の一定の区画で計画的に使用されたような状況ではない。

また、同様の理由から、藤原宮より古い時期に、この地にこれらの瓦を用いた施設が存在した可能性も低い。藤原宮造営以前に瓦を使用した施設としては寺院が考えられ、磚仏が2点出土していることは注目される。しかし、磚仏が出土した遺構・層位は、いずれも平安時代かそれより新しい時期のものであり、藤原宮期ないしその前後の遺構・層位にともなっている状況ではない。藤原宮内では藤原宮期以前の掘立柱建物、塀、溝、古墳などが検出されているが、寺院と推定される施設は確認されていないことも、こうした瓦の出土状況に合致するものである。

これらの瓦が藤原宮から出土するのはなぜか。まず、藤原宮外縁部付近から出土したものは、藤原宮近辺の寺院等の施設に使用された瓦が紛れ込んだ可能性が考えられよう。たとえば藤原宮東方の香具山西北には吉備池廃寺の同範瓦などが出土する木之本廃寺、藤原宮北方（所在地は諸説あり）には、法隆寺式軒丸瓦が採集された醍醐廃寺、藤原宮南方には、やや藤原宮から距離があるが、重弧文軒平瓦などが出土した小山廃寺や本薬師寺などが知られ、その候補となる¹⁾。

次に、藤原宮中枢部から出土したものであるが、その

表12 藤原宮出土の藤原宮以前の瓦一覧

調査次数	調査位置	型式	出土遺構	出土層位、時期
2	内裏地区東（大極殿院回廊東）	軒丸瓦（川原寺式か）		遺物包含層
10	西面大垣（西面南門南）	三重弧文軒平瓦		床土
10	西面大垣（西面南門南）	重弧文軒平瓦		遺物包含層
15	宮外周帯東南隅（高所寺池東）	軒丸瓦（高句麗系か）		整地土（上面が藤原宮期遺構検出面）
24	東面大垣（東面北門南）	軒丸瓦（豊浦寺式か）		床土
27	東面北門	重弧文軒平瓦	東外濠SD170	埋土に8世紀初頭までの遺物含む
27	東面北門	軒丸瓦（吉備池廃寺式か）	東外濠SD170	埋土に8世紀初頭までの遺物含む
34	宮西南隅	四重弧文軒平瓦	西外濠SD260	埋土に平安時代遺物含む
36	宮西面外濠西北隅	鷲尾か	西外濠SD260	埋土に平安時代遺物含む
45-4	宮西北官衙地区西北隅	四重弧文軒平瓦	SX3987	埋土に鎌倉時代遺物含む
58	内裏地区東（大極殿院東門東）	軒丸瓦（川原寺式か）	SX6760	遺物包含層
58	内裏地区東（大極殿院東門東）	軒丸瓦（山田寺式か）		遺物包含層
60-8	宮外周帯西南隅・西二坊大路	三重弧文軒平瓦		遺物包含層
69	宮西南官衙地区	軒丸瓦不明		床土
69-9	宮外周帯西南隅	磚仏	SD7687	埋土に14世紀の瓦器含む
75-1	西面外濠（宮西北隅付近）	重弧文軒平瓦		遺物包含層
80	西方官衙南地区南辺	川原寺式軒丸瓦		藤原宮期遺構の基盤土
100	内裏地区東・朝堂院回廊東北隅	山田寺式軒丸瓦		遺物包含層
100	内裏地区東・朝堂院回廊東北隅	法隆寺式軒丸瓦		遺物包含層
136	朝堂院東第六堂	重弧文軒平瓦		耕作溝
136	朝堂院東第六堂	四重弧文軒平瓦		平安時代堆積土
136	朝堂院東第六堂	重弧文軒平瓦	SX10214	平安時代溝
136	朝堂院東第六堂	四重弧文軒平瓦	SX10214	平安時代溝
136	朝堂院東第六堂	重弧文軒平瓦	SD10221	平安時代溝
148	大極殿院南門	軒丸瓦（飛鳥寺Ⅶ）		時期不明の土坑
153	朝堂院朝庭北部（大極殿院南門南）	三重弧文軒平瓦	SH10800か	藤原宮期礫敷か
153	朝堂院朝庭北部（大極殿院南門南）	重弧文軒平瓦	SD10804	埋土に10世紀の土器含む
153	朝堂院朝庭北部（大極殿院南門南）	重弧文軒平瓦	SH10800	藤原宮期礫敷
160	朝堂院北面・大極殿院東面回廊	重弧文軒平瓦	SH10800か	藤原宮期礫敷検出中に出土
163	朝堂院朝庭東北部	重弧文軒平瓦	SD10981	藤原宮造営期溝
182	大極殿院東南部（大極殿院南門北）	四重弧文軒平瓦		奈良時代整地土
182	大極殿院東南部（大極殿院南門北）	四重弧文軒平瓦		床土
182	大極殿院東南部（大極殿院南門北）	四重弧文軒平瓦		床土
182	大極殿院東南部（大極殿院南門北）	四重弧文軒平瓦		床土
186	大極殿院東南部（大極殿南）	重弧文軒平瓦	SX10888	藤原宮期礫敷
186	大極殿院東南部（大極殿南）	重弧文軒平瓦		耕作溝
186	大極殿院東南部（大極殿南）	重弧文軒平瓦		攪乱内
186	大極殿院東南部（大極殿南）	磚仏		耕作溝

型式、出土遺構、出土層位、時期は整理中のものを含むため、今後変更する可能性がある。

多くは藤原宮造営以前や宮造営期に、そして一部は平城遷都期、あるいはさらにそれ以降に持ち込まれたものである可能性が高いと考える。藤原宮中枢部の発掘調査では、藤原宮造営期の整地土が複数層認められ、さらに朝堂院朝庭や大極殿院内庭には礫敷が確認されており、藤原宮造営期の溝SD10981や朝堂院朝庭の礫敷SH10800、大極殿院内庭の礫敷SX10888からは重弧文軒平瓦が出土した。また、宮廃絶後も奈良時代以降の整地土や瓦礫を敷いて舗装した通路が確認されており、大極殿院地区の奈良時代の整地土から四重弧文軒平瓦が出土した。これらの瓦は、藤原宮造営期や奈良時代以降の埋立て、整地、礫敷など、この場所を造成した際に混入したものと考えられる。残存率が悪い小片が多いことは、これを裏付けるものといえる。これらの瓦は、瓦として屋根に葺く以

外の目的で持ち込まれた可能性が高いものとする。

まとめ 藤原宮出土の藤原宮以前の瓦の出土傾向を検討した。その結果、藤原宮周辺から紛れ込んだ、あるいは造成時に持ち込まれた可能性が高く、仮に建物に使用されていたとしても、まとまった型式の瓦が一定の区画に計画的に用いられたような状況ではないことを指摘した。ただし、今回の検討は、あくまでこれまで出土した瓦の傾向を分析したものである。今後、さらに異なる状況を考慮すべき瓦が確認されれば、あらためて検討したい。

（清野孝之）

註

- 1) 大脇潔『飛鳥の寺』日本の古寺美術14、保育社、1999。
花谷浩「京内廿四寺について」『研究論集 XI』奈良国立文化財研究所学報第60冊、2000。